

〈追悼文〉 琉舞と中本正智先生の思い出

横田, 礼子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

32

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

1995-02-24

琉舞と中本正智先生の思い出

横 田 礼 子

中本正智先生が亡くなられてから、早くも8ヶ月たちました。先生が、もうこの世にいらっしやらないとは、とても悲しいことです。いつも健康については細心の注意をしておられ、身心ともにお元気でしたのに、このように早く他界されるとはとても信じられません。

“にくまれっこは世にはばかり、よい人ほど早くなくなる”という諺は本当なのでしょうか。

私が先生にはじめてお目にかかったのは今から十五年前、沖文研に務めるようになってからでした。当時、先生は沖文研の委託研究員でおられ、『琉球の方言』の編集責任者として毎年発行することにご尽力くださいました。これは消えてゆく琉球方言の貴重な資料として国内外の研究者にとって大いに貢献しており、また沖文研の大切な財産として、この刊行は現在も受けつがれています。

先生の偉大な研究業績は、どなたもご存じのとおりですが、生前の先生は都立大学の本務と研究活動、超多忙な日々であられたと思います。そうしたなかでも、沖文研の会議後の飲みニケーションには心よく参加され、いつもごきげんで沖縄の海のこと、漁のこと、調査のこと等々、ニコニコしてお話下さった姿が今でも脳裏に浮びます。特に、琉舞のお手並みは定評があり、ごきげんな時にはよく踊られ、それがとてもお上手で、ピタッと板についた姿にみんなホレボレと観賞したものでした。いつもおだやかで、えらぶらず、誰に対しても同じように親愛にみちた温かいお人柄は、沖縄の人々のもつ長所の代表選手のように思えます。沖文研にとってもよき理解者であり、強い協力者で、常に大きな力でささえて下さいました。中国調査も、小湾調査もメンバーの一員として熱心に調査をすすめておられましたのに、調査の完成をみることなく、病にたおれたことはどんなに無念でしたか、先生のお気持ちをお察しできます。

先生は、大急ぎで人の一生分を歩いてしまわれました。さぞかしお疲れになったことと思います。でも先生の歩かれた足跡は、私達の胸にいつまでもやきついて生きつづけることを信じています。どうぞごゆっくりお休み下さい。ごめいふくを心よりお祈りします。

合掌

(法政大学大原社会問題研究所課長補佐)